

盛と改めたものらしい。

次に西念は如何と檢するに彼の父は井上盛長と云つて文治五年川中島に戰死して居る。八歳にして彼は父を失い、母とともに信濃水内郡駒澤に住し、後亦母を失い、終に宗祖の門に投じて西念の法名を授かり専修專念の行者となつて居る。晩年、武藏大田にうつり庵を結んで居る、宗祖門弟中最長の年長者の傳説をのこして居るが、これは傳説にあらずして事實である。百八歳の長命をもつて示寂して居る。

思ふに、三善一族は地方の文化方面に、井上一族は精神方面、即ち信仰方面に光を放つて居る。

宗祖に於ける廻向思想の展開

永 田 敬 信

廻向思想が佛教の中心課題であることは、今更云うまでもない。淨土眞宗といえども二種の廻向のほかには存在し得ないのである。

然るに宗祖にあつては廻向は如來本願力の廻向であつた。そのことを端的に示すものが、信巻に於ける第十八願成就の文の扱いである。そこでは至心廻向の文を「至心に廻向せしめたまへり」と訓じている。このことに就いては淨土系諸流に多く異義のあるところである。併し宗祖が敢てこのように讀まれるのにはそれだけの根據があり、それは云うまでもなく論・論註の指示に基づくものである。

今は詳説する暇はないが、要をとつて云うならば、論註では

五念門をその行の性格に依つて二種に分ち、その一つを彼土行と判じ、彼土行としての五念門成就を、因願の十八・十一・二十二の三願に依つて、その速得を的證している。このことは五念門の成就こそ佛の本願であることを示すものである。而してこれは如來の本願が五念門をその本質としていることを現わし、行者の此土に於ける行の成就こそその本願であることを顯わすことになるであらう。されば二門偈には五念門を詳述されて後、「無碍光佛因地の時斯の弘誓を發し、此の願を建てたまひき」と云い、また「願力成就を五念門と名づく」と説かれるのである。ここに如來より衆生への用きが生れる。この用きこそ廻向といわねべきものである。何故なれば、本願の本質である。五念門に於て他に對する用きを廻向と名づけられているからである。ここに於て宗祖の願成就の文に對する了解が生じたのである。

ところで、ここに一つの疑問の残ることを無視することが出来ない。それは至心廻向としての内容をもつのであれば、何故に始めより、その法を顯現しないのであらうかという疑問である。しかし本願に於て行者の自力廻向の如き表現をとるところに、むしろ本願の深き思惟を憶わねばならない。ややもすればこうした面が眞宗教學に於て等閑視されるきらいがあるのではあるまいか。宗祖は本願の文に他力廻向の意味のあることを示されるのであつて、文自體を書き換えられたのではない。成就の文自體が「至心に廻向す」であることに變りはない。

纏つて願成就の文に至心廻向といわれることの意味を勘按して見よう。思うに「至心に廻向せしめたまえる」如來の大悲は

「至心に廻向する」立場を根柢として始めて成立つものであるうか。我々は至心廻向に徹することに依り、至心廻向し得ざる自己を發見すると共に、至心に廻向したまえる大悲に遇うのである。されば至心廻向こそ止むを得ざる本願の要諦であると云わねばならない。

本来自力としての廻向は存在し得ない。ただ、形態的に自力廻向の外なき人間存在に對しての假設として示されたのであれば、自力廻向より他力廻向への展開には必然性があると云うことが出来る。随つて廻向は自力より他力へ展開して始めてその本然の姿にかえると云わねばならない。これが即ち佛教の歴史であり、親鸞聖人こそ、そうした佛教の史的展開の契機となつたのである。表題の意味も宗祖に於ける内面的な廻向思想展開の過程を示すというよりも、更に佛教に於ける廻向思想の史的展開の重要なポイントをなすことである。

我々は他力廻向の面のみを見て、その根柢に自力廻向のあることを見失うてゐるのではあるまいか。他力は自力と相對して存在するのではない。他力は自力を包み自力を超えたところにある。自力を否定することはそのまま他力を否定することになる。自力を盡して始めて他力を感ずることも出来るのである。ただ他力を感ずれば自力と執ずる心が捨たり、自力は無碍自在となるのである。

信卷御引用の涅槃經梵行品文の闕略について

西 本 龍 山

影印本信卷一二四頁末行に「乃至」として、左の二百七十九字(盈五・百枚左右)を闕略しておらるる。

「大王、色は無常、色之因縁亦是無常、從無常因、生色云何常。乃至識は無常、識之因縁亦是無常、從無常因、生識云何常。以無常故苦、以苦故空、以空故無我。若は無常・苦・空・無我、爲何所殺。殺無常、得得常涅槃、殺苦得樂、殺空得實、殺於無我、而得眞我。大王、若殺無常・苦・空・無我、若則與我同、我亦殺於無常・苦・空・無我、不列入地獄、汝云何入。爾時阿闍世王如佛所說、觀色乃至觀識、作是觀、已即白佛言、世尊、我今始知、色は無常、乃至識は無常。我本若能如是知、則不造罪。世尊、我昔曾聞、諸佛世尊常爲衆生、而作父母、雖聞是語、猶未審定、今則定知。世尊、我亦曾聞、須彌山王四寶所成、所謂金・銀・琉璃・頗黎、若有衆鳥、隨所集處、則同其色。雖聞是言、亦不審定。我今來至佛須彌山、則與同色。與同色者、則知諸法無常・苦・空・無我。」

その前文は「夫衆生、者名出入息、斷出入息、故名爲殺、諸佛隨俗亦說爲殺」とあり、その後文は「世尊、我見世間、從伊闍子、生伊闍樹、不見伊闍生、梅檀樹、我今始見、從伊闍子、生梅檀樹、伊闍子者、我身是也、梅檀樹者、即是我心、無根信也。無根者、我初不知恭敬、如來、不信法・僧、是名無根」とありて、阿闍世王の歡喜の相貌が示されてある。前文と後文との連絡は斷たれておる。

聖人が「乃至」せられたる涅槃經文は、無常・苦・空・無我